

説教余滴 2018年5月13日、

贈別（離別を惜しむ）杜牧

多くの人にとって、春は入学の時期、そして就職のとき。そして考えるまでもなく、新しい環境に進むためには、それまでの居場所から離れることが起こります。その意味では、離別・惜別の候と言えるでしょう。唐代、大陸の詩人は、友との別れを、優れた詩に表現しました。これまでに于武陵の「勸酒」、王維の「元二の安西に使いするを送る」をご紹介しました。もう一首を加えておきます。

《惜別（離別を惜しむ）》

多情却似総無情、唯覺樽前笑不成。

蠟燭有心還惜別、替人垂涙到天明。

多情は却（かえ）って、総（すべ）て無情なるに似たり。惟（ただ）覺（おぼ）ゆ、罇前（そんぜん）に笑（わらい）の成さざるを。蠟燭（ろうそく）心有りて、還（ま）た別れを惜しむ。人に替わりて涙を垂れ、天明に到る。

解釈 感じやすい心とは、総じて、何も感じない心に似ている。ただ自覚しているのは、別れの酒を前にして、悲しみのあまり笑うことのできない我が身のことだ。ああ、この蠟燭にも別れを惜しむ心があるのか。私に代わって蠟の涙を流し、いつしか夜も明けた。

作者は、杜牧（803—852）、字は牧之、中国晩唐時の有名な詩人。現代にも知られ、影響のある『孫子兵法』を書いた人でもある。

この贈別の詩は連作であつたらしく、この前の第1首を見ると、若い美男子でエリートであつた詩人の心を奪つたのは13歳の美しい少女の芸妓でした。芸妓を相手とする詩ならば酒宴の座興の一首とみることもできるでしょう。しかし、この詩のもつ清澄な美的世界からは、そのような戯れ言は全く窺われません。蠟燭が一晩中涙を垂らすのと同じく悲しくて、切なくて心を痛んでる姿が目に見えるように伝わってくる。